
春来たりて

FLASH

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

春來たりて

【Nコード】

N7418D

【作者名】

FLASH

【あらすじ】

「ああつ女神さまっ」の二次創作小説で、螢一とベルダンディーのお話です。気分的には拙作「Little Secret」の後日談というか続きというか……。短いす（汗）季節が移り変わる中、ベルダンディーが気がついたことは？

暖かな日差しが、街を包んでいる。

つい先日まではまだまだ続くと思われていた寒さだったが、季節が気分を変えたのか、今日はいきなり春を通り越して、汗ばむほどの陽気であった。

この急激な変化に、草木も鳥たちも戸惑っているようであり、桜など、それまでの遅れを取り戻すかのようにいつせいに花開き始めていた。それは他力本願寺も例外ではなく、敷地内に植えられた桜はつばみを一斉にほころばせ、まさに春爛漫とはこのことか、といった雰囲気であった。

心弾むような陽気の中、ひとりの女性が洗い上がったばかりの洗濯物をていねいに干していた。しっかりとしわを伸ばし、あるいは優しく物干し竿に洗濯物をかけていくたびに、稲穂色の、ポニーテールと言うにはいささか長い形にまとめた髪が楽しげに揺れている。「みんなの季節が、やって来たのね」

女性――ベルダンディーは桜を見つめながら、優しくつぶやいた。と、その言葉に応えるかのようにふい、と柔らかな風が吹き、桜の花びらがほんのひとひら、彼女の回りをくるくると踊るように舞い散っていく。

ベルダンディーはしばし手を休め、小さな命たちが輝く証に見入っていた。

やがてすべての花が消えてなくなろうとも、後にはみずみずしい若葉が茂り、やがて種を実らせる。移り変わりゆく命の営みが、確かにそこにあった。

彼女はしばし何事かに想いを馳せていたようだが、やがて我に返ると、今なすべきことを思い出したのか、足元に手を伸ばす。

ほどなくして、洗濯かごはすべてからになっていた。

「これでお洗濯はおしまい、っと。……あら？」

母屋へと戻りかけていた彼女の足がつい、ととまった。なにか気になることでもあったのか、たった今までいた方を振り返る。

別になにも問題はない。物干し竿に干し上げられた洗濯物たちは、少し白みを帯びた空にゆったりとたたずんでいた。

それはいい。

だが、なおもどこかがひつかかるのか、小首を傾げ、思い返すふうにしていたベルダンディーであったが、幾度かの確認の結果、ひとつの結論に達しつつあった。

「そうよね。だとすると……」

彼女は洗濯かごを手早く片付けると、屋敷へと上がりこむ。その面には先程までとは違い、かすかに憂色が浮かんでいた。

「やっぱり……。どこへ行っちゃったのかしら？」

居間、客間に始まり、ウルドやスクルドの部屋まで覗き込んでもベルダンディーの表情は晴れなかった。果ては風呂場まで覗き込んでいたが、これは単なる徒労に終わったようだ。

段々と足が速まっていく。深まる憂いを顔に浮かべたまま、最後に向かったのは螢一の部屋であった。

「あ……」

小さく上げた声を押さえ込むと、ベルダンディーはそつと部屋を覗き込む。

そこでは螢一が机に向かってなにやら本を読みふけていた。表紙からするに、愛読しているバイクの雑誌のようだ。ページをめくるたびに、セーターの右袖に織り込まれた「K1」の文字が小さく揺れた。

学業の邪魔をせずに済みそうと分かり、ベルダンディーは小さく胸をなでおろしたが、彼女の憂色はかえって深まったようにも見えた。

しばし入り口にたたずんだまま、ベルダンディーはどうしたものかと思案顔に暮れていた。

だが、やがて意を決すると背後から螢一に歩み寄り、その場にひざまづいたかと思うとそのまま螢一に抱きついた。

「ふーん、このバルブ、今ならこのくらいの値段で手に入るのか。これならちよつと小遣いを切り詰めればなんとか……おわっ!？」

雑誌の内容がいささか魅力的だったのか、螢一が背後の気配に気がついたのは、すでにしっかりと抱きすくめられた後だった。

「螢一さん」

すぐ耳元で声がして、螢一の全身が硬直する。ベルダンディーは彼の肩口に顔を埋めたまま、微動だにしなかった。

慌てたのは螢一である。彼は何かと振り向こうとしたが、すぐ目の前、まさに触れんばかりのところに彼女の顔があるのに気がつく、あつという間に満面を朱に染めた。

ベルダンディーの髪の毛が首元を軽くくすぐっている。花の香りにも似た彼女の匂いと静かな息遣い、なによりも背中にあたると感じる感触に気がつき、螢一の心臓はタップダンスを高らかに踊り始めた。

——な、なにが一体どうしちゃったんだ!？　べ、ベルダンディーは一体……？

すっかり焼け付き寸前の脳で必死に考えるも、螢一にはさっぱり理由が思い浮かばぬ。もしやウルドかスクルドがまたなにかやらかしたのか、とも思ったが、ふたりが近くにいる気配もない。

もつとも、もし原因がスクルドだったら、ベルダンディーがこうする前に止めに入っていたことは疑いないが。

「べ、ベルダンディー……」

見事にオクターブほど跳ね上がった声で言いかけ、そこで初めて螢一は彼女の表情に気がついた。

「……!？」

彼の表情がかすかに陰しくなる。心に暗雲が立ち込め始めた。

「螢一さん」

ようやくのことでベルダンディーが顔を上げたが、その瞳に浮かぶ真剣な光に、螢一は思わず息を飲んだ。心の中の暗雲は更に広がりを見せていたが、今の彼にはそれを否定する要素はまったく見つからなかった。

「……な、なんだい？」

——うまく、言えただろうか？

どうにか声は震えずに済んだ。

本当のことを言えば、次の言葉を聞くのが怖い。できることならば大声を出しても遮りたかった。

だが、そんなことはできない。ベルダンディーが、彼女が真剣に告げようとしていることから逃げることなど、彼にできようはずもなかった。

ひそかに心の中でのみ汗を流し待ち受ける螢一、セーターの裾を掴むベルダンディー。

わずかの沈黙の後、彼女が口を開いた。

「このセーター、そろそろ洗いませんか？」

「……へ？」

螢一がようやく声を発することができたのは、たつぷり5秒ほども経ってからのことであつた。ベルダンディーは申し訳なさそうな表情で話を続けているが、螢一の脳には半分も届いていないようだ。「これを着始めてから随分経ってますし、その、汗とかも染み込んでるでしょうし。陽気もいいですから、ちよっとお手入れを……螢一さん？」

まったく反応がないのに気がついて、ベルダンディーが不思議そうな声を上げた。と、螢一の上体が大きく傾く。

「きゃあつ！？」 螢一さん、どうなさったんですか、しっかりしてくださいっ！」

「あ、あはは、はは……。よかった……」

彼女の声を遠くに聞きながら、螢一は小さく、だが心の底から安

堵しつつぶやいた。

もつとも、傍目にはこれを「気絶」というかもしれぬが。

大きめのたらいにぬるま湯が張られ、洗剤が溶かし込まれる。ちよどいい按配になったところでベルダンディーはセーターをそつと沈み込ませた。

「優しく、ゆっくり、押し洗い……と」

リズムカルな動きとともに、彼女の手中でセーターは優しく洗われていく。同じ要領で、この冬新たにラインナップに加わった手袋やマフラーも陰干しされている。季節の移り変わりにあわせ、彼らもまたひと時の休息につこうとしていた。

「ごめん、ベルダンディー。面倒かけちゃって……」

「いえ。……それにしても、どうしてこんないい陽気になっても着ていたんですか？」

と、螢一の顔が再び赤らんでくる。不思議そうに見つめるベルダンディーに、彼はつぶやくように言った。

「その、ベルダンディーが編んでくれたセーターだったから、俺、嬉しくてさ。なんとなく、手放すのが惜しくなっちゃって……」

「あ……」

それを聞いてベルダンディーの頬も軽く桜色に染まったが、同時に口元には微笑みが浮かんでいた。

「それは嬉しいですけど、このままでは痛んでしまいますよ。また冬になれば着ることができるようですから。今はゆっくり休んでもらいましょう？」

「う、うん。そうだね」

「それに……」

「？」

ベルダンディーの頬の朱が強くなっていく。

「その、このセーターもそうですけど、マフラーや手袋も、大事に使ってくれましたよね？　ありがとうございます」

「あ、ああ。そりゃもちろん……」

「今この手の中にあるものたちも大事ですけど、私は、螢一さんにはもっともっと、たくさん、いろんな物を編んであげたいんです」

——ずっと私の想いを、感じてほしいから……。

口には出さねども、頬が熱くなるのが自分でもわかった。それでなんとなく察したものが、螢一の頬まで赤くなる。

「は、ははは……」

「ふふっ」

笑みを交わす螢一の心に、もう不安はなかった。

——まだ、一緒にいられるんだ。本当によかった。……ありがとう、ベルダンデー！

「どうか、なさいましたか？」

「え？　いや別に。……そうだ、よかったらこのあと、どこかに出かけないか？」

「いいですねっ、それじゃ私、お茶を用意しますね」

「ああ、たのむよ」

弾んだ声が辺りに満ちる。ふたりにとって、どうやら今日もいい1日になりそうだった。

小さな出来事、確かめられた想い。

ひとつひとつの積み重ねは、ふたりにとってかけがえのない宝物。そして今日もまた、ひとつ。

（おわり）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7418d/>

春來たりて

2010年10月8日15時49分発行